〔駒沢女子大学　研究紀要　第17号　p. 235 ～ 243　2010〕

建築を基軸とした移民研究手法の提案
―トランスナショナル・ハウジング・リサーチ・プロジェクト―

牧　野　冬　生*

New Methodology of Migration Studies Using Architectural Survey
― Transnational Housing Research Project ―

Fuyuki MAKINO*

Abstract

Transnational Housing Research Project suggests discussions over the transnational living style of Mexican migrants on the two different, but indispensable aspects, architectural and anthropological. From architectural point of view, we analyze architectural styles of migrants' houses including designs, traditional construction processes and structural engineering, especially of those that are constructed in their homeland by the money sent from U.S. At the same time, from anthropological perspective, we focus on social and economic impact that the construction of such houses have on their homeland community, such as a local construction guild, as well as the way of using them. Based on the analyses, we examine what it means to have 'houses' to the migrants. As a result, we urge to introduce the interperspective approach to the examination of the ongoing phenomenon of 'Transnational Housing' characteristic in the way of living of Mexican migrants.

1．はじめに

グローバル化した現代社会においては、移民労働者は祖国を離れ別の国に生活拠点を移していても、頻繁かつ継続的に出身国に帰省し出身国と結びつきを維持する新しい生活形態を形成している。こうした生き方を選択した人々の生活領域は、国境によって分断されるものではなく、トランスナショナルな繋がりから成立する新たな生活領域と理解できる。

移住先で移民労働者として暮らしながら、故郷との繋がりを保つ具体例のひとつが、送り出し社会への海外送金による住宅建設である。移住先で貯蓄した資金を使って故郷に住宅を建てる例は、世界各地で見ることができる。彼らが建てた住宅は、送り出し社会の都市化や雇用の拡大、建設プロセスや住宅デザインの変容など地域文化の再構築に大きな影響を与えている。海外送金によって送り出し社会に莫大な経済的

*駒沢女子大学 非常勤講師
早稲田大学 アジア太平洋研究センター

便益が提供される一方、土地価格の高騰、広大な不在家屋の散在、郊外への都市拡大に伴うインフラ未整備地域内の居住、伝統的景観の破壊、社会構造の変容など新たな社会問題が現れている。

こうした移民が建設する住宅は、故郷に残った家族や親族が居住したり、将来出稼ぎ労働をやめて永住帰国した際の住居又は長期休暇を利用して一時帰省した際に数週間滞在する拠点という多様な目的で建設される。住居は人々にとって最も基本的で重要な構築環境であり、住居建設の実現には様々な人間関係や社会組織が絡み合っている。住宅建設の目的は、移民と地元住民との紐帯関係を踏まえた上で捉えていかなくてはならない。例えば、移住による家族構造と親族関係の変容、移民者同士の社会的ネットワークの形成、移住先での成功と失敗によるステータス（階級）の変化、宗教行事と同一化している送り出し社会の伝統的フェスティバルやカーニバルのための帰省、結婚相手を同郷出身者にもとめる行動形態、情報技術の進展に伴う都市的ライフスタイルの流行、メキシコ人的アイデンティティの再認識など、ある時代や集団における共通認識の総体として住宅を捉えていかなくてはならない。

次に過去の移民研究における住宅の扱いについて、他分野の関心領域も含めて概観する。最も事例研究が盛んなメキシコからアメリカへの移民研究を見てみると、経済学や人口統計学から海外送金による住宅建設が故郷に与える経済的なインパクトに関する研究、文化人類学の参与観察[1]によるトランスナショナルな移民が受け入れ社会に与える社会的影響、都市計画学からはヒスパニック人口の増加と居住地域の拡大が受け入れ社会の都市化に与える影響、社会学による受け入れ社会の都市論的分析、カルチュラル・スタディーズの領域からは空間（space）・地理（geography）・場所（place）をキーワードとして、移民のアイデンティティと政治性の関わりなど多くの研究がなされている。

特に、グローバル化に伴って想起された移民をめぐる新たな都市論は、移民労働者コミュニティの非空間性や情報ネットワークの利用など「時間－空間の圧縮」[2]から着目すべき成果があるが、移民の送り出し社会は海外送金を主とした経済面から語られるに過ぎず、都市論の主要な研究対象として認識されてこなかった。空間構築を担う建築学的視点からは、移民の住空間の使い方、住宅計画や建築構造、内部プランなどから移民の住宅に特徴的な事象にかかわる分類が個別になされているにすぎない。また、研究成果を調査地域と共有することは稀であり、研究と実践は分断されている。まして、共有された成果を基に移動する人を前提とした新たな空間構築（都市計画）に具体的に応用していく研究は未だ見受けられない。

本稿では、移民にとって最も身近な生活の舞台である住宅を中心的な課題とすることで、いままで各分野で分断されてきた議論を協働させる新たな手法「トランスナショナル・ハウジング・リサーチ・プロジェクト」について、その方策を考察する。本プロジェクトは、将来的に定住者と移民者の多元的な視点を包摂した新たな空間構築を目指すことで、今まで積み重なってきた議論を相互批判的に共有することを目指している。

2．トランスナショナル・ハウジング・リサーチ・プロジェクト

トランスナショナル・ハウジング・リサーチ・プロジェクトは、建築学・都市計画学・人類学の視点を組み合わせたアプローチによって、移民と住宅の関係性を明らかにし、視覚的イメージを利用することで、移民と住宅の関係性

を調査者と被調査者を包摂した多元的視点から再考することを目的とする。本プロジェクトは、住民中心指向の環境構築へ向けた理論的基盤となるものである。基本的論題は、以下の３点である。

（１） 移民のどのような社会的、文化的特徴が、構築環境のどのような特徴として明示的又は暗示的に現れているのか？

（２） 構築環境のどんな特徴が、いつ、なぜ、どのように、どんな状況下で移民に影響を与えているのか？

（３） 前述１）２)のように、移民と構築環境の間に相互作用が見られるとき、それらを関連づけるメカニズムとは何であるのか？

３．全体のシステムと部分としての住宅

トランスナショナル・ハウジング・リサーチ・プロジェクトでは、移民が暮らしてきた住宅と、これから暮らしていく住宅を調査対象とする。住宅を調査対象とする理由は、主に四点である。第一に、どんな集団も特定の住宅や生活にかかわる共有のスペースを必ずもっているので、比較研究することが可能である点、第二に、住まいは人々にとって最も基本的な生活行動（就寝、調理、食事、会話など）を行う場所であり、よって具体的な生活行動をみる上で最も重要な構築物である点、第三に、人間社会には様々な種類の構築物がある中で住居は総量として最も多くの割合を占める点、第四に、住居には住民達が共有する特徴が反映されている点である。また、移民の行動形態を考えるとき、住宅との関係性だけではそのすべてをとらえることはできない。調査の基本的対象である住宅は、それが全体のシステムの一部分としてどのように機能しているのかについても考えなければならない。

例えば、ある住宅Ａを考えてみる。この場合、住宅Ａで行われるある生活行動のプロセスは、すべて住宅内のセッティングで行われるとする。例えば、厳寒地域の冬季の生活を考えてみるとよく分かる。次に、住宅Ｂの場合を考えてみる。この場合、住宅Ｂで行われるある生活行動のプロセスのうち、ひとつが住宅内で行われ、その他すべては広く分散し、住宅外で行われることとする。この場合は、住宅Ｂのみを調査対象としていたのでは、生活行動と住宅Ｂの関係を正確に把握することはできない。ある生活行動にどういったプロセスが存在し、それがどこで行われているのかを住宅内外のセッティングを含めて調査することによってはじめて、住宅Ｂを把握することが可能となる。

ここで、実際の移民の住居を考えてみると、ある特定の場所に定住して暮らす場合と異なり、移民の住宅はひとつに限定されていない。例えば、メキシコ人移民が建設し暮らしてきた住宅は、①故郷で移民が幼少期を過ごした伝統的な建築様式によって建てられた住宅、②米国で彼らが住む都市住宅、③カリフォルニアの中産階級向けの住宅のデザインを模した、移民が海外送金を使って故郷に建てた新住宅の３類型が考えられる。この場合は、これら三類型の住居を平行して調査する必要がある。

また、ある生活行動に関わるプロセスの重要な一部をなす住宅は、住宅群、近隣、集落などさらに大きな単位の一部であることも認識しておかなくてはならない。これらは、個別の住宅と直接的に影響を与え合う重要な要素である。移民がある住宅を選定するとき、個別の住宅に関わる要素だけではなく、ある特定の街区、敷地、近隣、地区、さらにより大きな都市というスケールの要素を同時に選択しているからである。

４．人と住宅との関係性の把握に向けて

２章の基本論題（１）と（２）に関して考えると、基本論題の文言に「社会」や「文化」という表現が含まれている。命題がこうした様々な定義が可能な抽象的概念のままでは、人間行動と住宅の相互関係を具体的に見ていくことは不可能である。エイモス・ラポポート（Amos Rapoport）は、文化と環境の間の関係の特徴が確立できないのは「文化」という用語に込められた非常に高度な一般性と抽象性に主な原因があるとして、この抽象的な概念を分解することで、デザインと文化の相互作用をはっきりと示すことができると述べている[3]。

ラポポートは、過度の抽象化を解消するための文化の分解として、「親族関係、家族構造、役割、社会ネットワーク、ステータス、アイデンティティ、施設など」が、より具体的で観察可能な表現であるとし、また過度の広がりと一般性を解消するための文化の分類として、「世界観、イメージ、規範、ライフスタイル、活動システム」がより限定された文化の表現であるとしている。彼は、これらの分解した要素が時代や状況によりある割合で構築環境に影響を与えていると考える。また、こうした要素をさらに細かい要素に分解することが可能であり、そうした手順によって容易に環境と文化を関連づけることが可能となるとしている。

こうした手法には大きな問題点がある。それは、文化が限定された要素に分解可能であり、それらが独立して環境構築に影響を与えているという仮定である。文化人類学においては、文化とはある限定された要素に分解できるようなツリー構造ではなく、それぞれが関係性を持つセミラティス構造として捉えるのが前提である。彼が分解した要素は独立して存在するのではなく、互いに作用しあっている。また、こうした要素は確定したものではなく、調査によって新たな要素が追加されることや削除されるものがあることにも留意すべきである。一方、ある要素がどのような割合で構築環境に影響を与えているのか客観的な指標を示すことは、困難である。親族関係や家族構造などを、ある特定の家族についてのみ把握することが可能であるとしても、個別の文化的要素と住宅の関係性に着目しているだけでは、移民と住宅をめぐる複雑な関係性を把握することはできない。

そこで、本プロジェクトでは１）建築学・人類学的調査による個別的なケースをみる視点、２）人類学・社会学的分析による集団的なケースをみる視点、３）構築環境の形成に関わる要素のトレードオフの関係性をみる視点、の３つの視点によって住宅を捉えていくことで、住宅にはどのような要素が存在し、互いに作用し合う要素がどのように構築環境に影響を与えているのか考えていきたい。

Ａ）建築学・人類学的調査による個別的なケースをみる視点

ある個別の住宅に関して建築学的な踏査調査によって、住宅の平面・立面・断面、意匠的特徴、建設工法と建設プロセスの変容、近隣との関係、土地管理の方法、住宅の利用形態などを把握する。また、同時に人類学的な参与観察によって、特定の家族に焦点を当て、親族関係、家族構造、役割、社会ネットワーク、ステータス、アイデンティティなどについて把握し、それぞれの文化的要素同士がどのような関係性を持っているのか把握する。現地踏査によって、住宅の空間的な要素と文化的要素を身体的感覚として把握することは、インタビューする際に非常に有効に働く。基本論題（１）と（２）に関して、こうした参与観察を伴う空間の踏査調査によって、まず個別の住宅の事例から人の行動と空間の関係性を把握する。また、フィールドワー

クにおいて重要なことは、調査時点では直接住宅に関わらないと思われる要素も含めて、できるだけ多くの情報を把握するように努めることである。

B）人類学・社会学的調査による集団的なケースをみる視点

文化人類学は、参与観察による長期のフィールドワークによって、その対象地域における一般的な性質を見いだしていく点に特徴がある。社会学においては、アンケート調査や公開されている既存の社会調査データなどを資料として、大規模なデータファイルの計量分析をもとにしてある傾向を分析することになる。ある集団として移民を捉える場合、単に国際労働移民という共通項だけでは、その行動形態は様々であり一般化することは難しい。そこで、本プロジェクトでは、故郷への帰省に対する強い動機となるノスタルジアを集団としての移民を捉える基底とすることで、基本論題（1）と（2）に関して、移民と住居の関係性を把握する方法を考察する（5章参照）。

C）構築環境の形成に関わるトレードオフの関係性をみる視点

住宅や居住環境の形成においては経済的社会的要素が絡み合い、ある特定の要素が住宅建設のプロセスでは追求され、一方で、ある要素は犠牲となる。こうした要素間のトレードオフの関係性を調査することは、住宅環境の形成の仕組みを知る大きな手掛かりとなる。例えば、建設場所と住居サイズのトレードオフを考えてみる。移民がより利便性の高い都市中心部を選択すると、必然的に一戸建て住宅から集合住宅への選択を余儀なくされ、大きな敷地と余裕のある住宅を入手するのは非常に困難となる。どんな要素を重要視するかについては個人ごとに様々な理由があるが、住宅建設という行為が経済的制約の中で行われることを考慮すると、移民の判断が明確な形で住居要素として表出する。

基本論題（3）に関して、移民がどういう状況下でどういう判断をしたのか調査し、また構築環境がその判断に与えた影響を調査することで、移民と構築環境の間にある相互作用の実態を把握することが可能となる。

住宅は、非常に個人的な存在であると同時に社会的な存在である。A）とB）の視点を比較することで、個別的視点と集団的視点の共通点と相違点を得ることが可能となる。C）の視点は、住宅の建設プロセスにおいて、どんな文化的要素がより追求され、一方でどんな文化的要素が犠牲にされているのか二律背反の関係をみる視点である。A）B）の調査結果にC）の視点を追加することで要素同士の相互作用を把握し、どの文化的要素がより特徴的に住宅に影響を与えているのか知る契機となる。

5．移民とノスタルジア

故郷との繋がりを維持し継続する主な動機のひとつにノスタルジアがある[4]。ノスタルジアは、元々医学用語で「故郷へ戻りたいと願うが、二度と目にすることが叶わないかも知れないという恐れを伴う病人の心の痛み」と定義される。現在は、日常会話でもノスタルジアという言葉が使用され、時間的に遡って過去の特定の時期又は空間的に離れた場所を想像し、ある特定の時間や空間を対象として「懐かしい」という感情で価値づけることを意味する。通常は負の部分は除外され、イメージが都合よく再構成される場合が多い。また、本人がその時間や空間を実体験したかどうかは必ずしも問われず、第三者からの情報に基づいて想起してノスタルジアを持つことも可能である。

こうしたノスタルジアは、国境を越えた移民に限らず農村から都市への国内移民も当然存在する。国内移民の方が、初めて故郷から離れるという意識から、より強いノスタルジアを感じているという指摘もある。国境を越えて生活する移民と、国内移民の間ではどのような差異があるのか。また、若い世代と年配の方によってどのような違いがあるのか。例えば、ある移民にとっては、故郷は伝統的な男らしさを学ぶ場所でありかつ恋人を作る場所であるし、一方で実際の故郷の風景を知らない移民にとっては、彼らの上の世代に聞かされた空想的故郷に向けたノスタルジアであるために、物理的空間と結びついていない可能性が高い。又は、イベントやフェスティバルが開かれるある特定の時期と場所においてのみノスタルジアを感じるのかもしれない。また、インタビューによるとノスタルジアを語るのは男性の方が女性よりも多いことを考えると、男女によってノスタルジアを引き起こすイメージには差異がある。ノスタルジアとは一つの固まった概念ではなく、世代や男女によって異なる。

そこで、ノスタルジアを「理想的な自己や生活を取り戻すために感じる故郷への思い」と定義することで、ここに世代や男女を超えたノスタルジアの共通項を見出すことを試みたい。受け入れ社会において、多くの移民は、自分はマイノリティであると感じている。つまり、理想的な自己や生活を定義する故郷の風景、習慣、伝統、生活様式、人間関係、ジェンダー、社会的アイデンティティ、などの要素から阻害されていると感じ、その要素を自分は受け入れ社会で手に入れることができないと感じている。これを取り戻すために感じる故郷への思いをノスタルジアであると定義することで、移民を集団的に語ることが可能となる。

米国への移民の間では、80年代以降に移民のノスタルジアが非常に具体的な形で表れる。その理由はいくつか考えられるが、そのひとつが移民法である。特に移民法改正・管理法（Immigration Reform and Control Act of 1986）の成立は合法化移民を大きく増加させた。合法的に故郷から離れることが可能になった状況が、移民のノスタルジアを顕在化させたと考えることもできる。メキシコでは、以前は移民に対する国民感情として国家の裏切り者という見方が通例であったが、合法的移民の増加によって国民感情も徐々に変化し、故郷から去っていった移民を故郷に受け入れる土壌が生まれた点も考慮しなければならない。

一方で、90年代以降は、メキシコの地方都市において教会や商業セクターや知識人が、ノスタルジアを地方都市発展のための言説（ディスコース）として利用し始めた。メキシコ地方の群や市行政レベルで、持続的な経済開発プロジェクトとして成り立たせることができないかという動きもある。こうした経済と結びつくディスコースとしてのノスタルジアは、移民に対してある固定されたノスタルジア（故郷のイメージ）を作り上げる。地元の宣伝用ポスターや、フェスティバルのパンフレット、地方の知識人のスピーチ、などを検証することによって、移民が共通して抱くノスタルジアを分類し故郷の物理的実体とどんな相関関係があるのか引き出すことが必要である。

ノスタルジアに関しては、移民と地元の住民や保守層との比較作業も視野に入れていかなくてはならない。地元で出版される雑誌には、「移民がアメリカからもたらした異質な文化によって故郷が破壊された」「前の古きよき時代を懐かしむ」というフレーズが載せられている。保守層や地元の伝統的イメージは、移民と比較するとどのように違うのか。古いタイプの男らしさ、ジェンダー、帰属意識、若者が抱くような

自由な遊びの空間としての農村の風景は、あるものは実体として都市に結びつき、あるものは具体的な実体を持たないイメージにすぎない。また、メキシコでこれまで構築されてきたナショナルディスコースとしてのメキシコとノスタルジアの関係も同時に考える必要がある。

6．住民との相互批判的な解釈

4章にて得られた調査結果は、将来的な課題として住民中心指向の環境構築へ向けた建築的実践への足掛かりとなることを目指し、「視覚化されたイメージ」を通して観察者の視点と住民の視点から情報共有する必要がある。

6.1　建築人類学とは何か：観察者の視点と住民の視点

建築人類学の目的は、従来の①他者（others）、媒介者としての②人類学者（anthropologist）、報告を受容する③読者（readers）と聴衆（audience）という枠組みを超えて住民との協働によって、生活やコミュニティ形成にも積極的に関わる建築的プロセスの中で異文化理解を目指すものである。建築人類学における「建築」とは、可視的な物質としての建物、それらの内部又は間にできる空間、人々が集まる場や界隈など顔を合わせることによって成立する場所性、さらに頭の中に描かれるイメージとしての建築や空間まで含む、より大きな概念「広義の建築」である。建築人類学は、こうした広義の建築に関するフィールドワークの結果を「視覚化されたイメージ」という共有の枠組みを軸にして住民と相互批判的に共有する。

6.2　視覚的表現による住民との共有

「視覚化されたイメージ」は、調査結果を具体的な視覚的表現としたものである。具体的には、平面的表現（ドローイング、スケッチ、平面グラフィック）、立体的表現（模型、建築）、映像的表現（連続したシークエンス）、専門的表現（地図的表現・図面表現）である。これら視覚的表現は、住民参加型のプロジェクトにおいて実務上非常に有効な伝達手段であることが多くの事例から明らかにされている。ステファニー・デューア（Stefanie Dühr）は、広域スケールの空間計画において地図的な視覚表現（図表1）が、都市計画の主要なメッセージを伝えるツールとして有効に働くことを指摘している。

デューアは、視覚的表現によって、住民同士や住民と行政の意見の相違が明らかになり、結果として両者を合意形成へ導くことになったと

図表1　地図的表現

出所：Duhr（2007）

指摘した。また、合意形成における視覚的表現の必要性については、バリー・ニーダム（Barrie Needham）によるオランダのフリースランドの事例[5]や、マイケル・ノイマン（Michael Neuman）によるスペインのマドリッド南部の事例[6]など、多くの事例研究がなされている。

一方でエドワード・ロビンス（Edward Robbins）は、「視覚化されたイメージ」の矛盾する役割にも言及している。ロビンスは、「建設過程に関わる多様な関係者が建築プロジェクトにおいて雑多で複雑な側面に対処するために、ドローイングは共通の言語を提供する」としながらも、一方で「多くの関係者の社会的対話と社会的関係を秩序立てし、社会的ヒエラルキーを与え、建築の社会的産物が秩序立てられるための重要な手段を提供する」として、「視覚化されたイメージ」が必ずしも平等な社会的対話を促すのではなく、ある権力関係を背景にして利用される可能性を指摘した[7]。

「視覚化されたイメージ」を他者との共有と批判的解釈の基盤として利用する可能性については、建築と都市計画から多くの事例研究がある。この枠組みは、本プロジェクトにおいて「移民と人類学者が解釈を共有する」ために重要な要素であり、この方法の理論化に向けては、理論と実務の両面から検討しなければならない。

7．おわりに

本稿ではトランスナショナル・ハウジング・リサーチ・プロジェクトの枠組みについて説明した。本プロジェクトは、既存の学問分野の枠と調査者と被調査者という枠を超えて、多元的視点を含んだ議論の場を提供したいという試みである。

また、将来的な展望としては、本調査結果を実際の都市環境に還元していくことを目指している。そのためには、本プロジェクトで得られた結果から、移民、送り出し社会の住民、地元行政担当者を含めて今後の都市環境づくりのあり方を検討し、具体的な構築環境の提案をしていく必要がある。トランスナショナル・ハウジング・リサーチ・プロジェクトは、都市に住む定住者と移民者が快適に愛着を持って過ごすことのできる都市環境作りに応用できると信じている。

8．注

1）Brettell（2000）, pp. 77-135
2）ハーヴェイ（1999）p. 308
3）ラポポート（2008）, p. 109
4）Hirai（2008）
5）Needham（1997）
6）Neuman（1996）
7）Robbins（1994）p. 4

9．参考文献

【英語・西語文献】

Brettell, Caroline（2000）“Theorizing Migration in Anthropology”, *Migration Theory : Talking across Disciplines*. Routledge, pp. 77-135.

Calderón, Emmanuel（2010）“El habitar transnacional. La construcción de la ciudadanía de una comunidad mixteca migrante desde sus prácticas de habitación”, LASA2010.

Davis, Mike（2000）*Magical Urbanism : Latinos Reinvent the US City*, Verso.

Dühr, Stefanie（2007）*The Visual Language of Spatial Planning : Exploring Cartographic Representations for Spatial Planning in Europe*, Routledge.

Hirai, Shinji（2008）“La Virgen de la Asunción viaja a California : migrantes mexicanos y construcción de circuitos simbólicos y emocionales transnacionales”, en *Vírgenes*

Viajeras, e-misférica, the Hemispheric Institute's online journal, 5.1.

Makino, Fuyuki (2010), "A Study on 'Transnational Housing from the perspective of Architectural Anthropology", LASA 2010.

Needham, Barrie (1997) A Plan with a Purpose : the Regional Plan for the Province of Friesland 1994, *Making Strategic Spatial Plans : Innovation in Europe*, P. Healey & A. Khakee & A. Motte & B. Needham (eds), pp. 173-190.

Neuman, Michael (1996) Images as institution builders, *European Planning Studies 4(3)*, pp. 293-312

Robbins, Edward (1994) *Why Architects Draw*, MIT Press.

Zamorano, Claudia (2010) *Navegando en el desierto. Estrategias residenciales en un contexto de incertidumbre*, Casa Chata-Ciesas.

【和文献】

ハーヴェイ，デヴィッド（1999）『ポストモダニティの条件（社会学の思想３）』，吉原直樹（訳），青木書店.

ラポポート，エイモス（2008）『文化・建築・環境デザイン』，彰国社.